# The Possibility of Reading the Sociological Classics : In Consideration of the Dispute Between Jeffery C. Alexander and Charles Camic


| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-10-02 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/9732 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

金沢大学文学部論集　行動科学・哲学篇
第28号　2008年　45-63

# 学説研究の可能性
## －Jeffery C. Alexander と Charles Camic の論争から－

田邊　浩

The Possibility of Reading the Sociological Classics:
In Consideration of the Dispute between Jeffery C. Alexander and Charles Camic

Hiroshi TANABE

### 1　はじめに

近年，社会学というディシプリンにおいて，理論への関心が低下しているということがしばしば話題となる．実際，若い世代においては，理論や学説研究を専攻する人は少なくなっているように思われる．たとえば，理論研究では研究者としての就職口がなかなか見つからない，という事情もあるのかもしれない．これは，本人の主体的な意図からよりも，その本人をとりまく状況，すなわち外在的な要因から説明するものである．

この内在的要因と外在的要因からの説明は，本稿の主題に関して大いに関係があるが，それはともかく，実際に，理論や学説研究への関心が低下しているかどうかは必ずしも定かではない[1]．しかし，かりに本当に理論や学説研究への関心が低下しているとしたら，社会学においてはもはやそれらは不要なのであろうか．社会科学のなかでももっとも自然科学的であるとされる経済学のような学問においてさえ，経済学史の著作が数多く出版されていることから考えても，学史を学ぶ必要性がなくなったわけではないように思う．社会学においても，これまで社会学の歴史のなかで積み上げてきたものを捨て去ってもよいなどと考える人はほとんどいないだろう．

そうだとして，現在において，学説研究をすることにいかなる積極的な意味があるのだろうか．社会学の古典をいかに読むことができるか，あるいは読むべきなのか．いささか古臭いテーマではあるかもしれない．だが，学説研究が衰退しているいまだからこそ，このことについて再考が必要とされているともいえるのではないか．

本稿では，この主題のために，Jeffery C. Alexander と Charles Camic の論争を取り上げたい．彼らは初期 Parsons の読み方をめぐって論争を繰り広げた．これは，後述するように，単に Parsons 解釈の域にとどまるものではない．古典の読み方を検討するにあたって，興味深い素材を提供するものであると考える．本稿においてこの論争を詳細に紹介し，それ

を手掛かりとして考察を進めたいと思う．

## 2　論争について

### 2.1　論争の当事者

本稿では，Alexander と Camic のあいだの論争を考察のための素材とするが，まずは論争の当事者について確認しよう．Alexander は日本においても名を知られた，アメリカの社会学理論家である．1947 年生まれの彼は，Parsons の弟子である Robert Bellah や Mark Gould のもとで学んだ．1969 年にハーヴァード大学を卒業し，カリフォルニア大学バークレー校にて 1978 年に博士号を取得している．その後，カリフォルニア大学ロスアンジェルス校で長らく教授をつとめ，現在はエール大学の教授であり，エール大学文化社会学センターのディレクターでもある．Alexander は機能主義の後継者としてネオ機能主義を展開して国際的に名を知られるようになり，80 年代以後においてアメリカを代表する理論家といってよい．現在では，「ネオ機能主義のプロジェクトは終わった」とし，その関心を移し，文化社会学（sociology of culture ではなく，cultural sociology）の研究を進めている．

他方，論争を仕掛けられたもう一人の当事者は Camic である．彼は，古典や現代の社会学理論や学説史研究，そして知識社会学や科学社会学を専門とするアメリカの社会学者である．ピッツバーグ大学を 1973 年に卒業し，その後シカゴ大学で学び，1979 年に博士号を取得している．その年にウィスコンシン大学マディソン校で職に就いて以来，そこに勤め続け，現在は教授である．彼には古典的社会理論の研究に関する何冊もの編著があり，アメリカにおいて社会学史研究や思想や知識の社会学的研究をリードする存在であろう．

### 2.2　論争の概要

さて，Camic は 1970 年代後半以来，Parsons 研究を継続して行ってきた[2]．Camic は，Parsons がその初期に提出した理論的方法論的アイデアがいかにして生み出されたのかを，その歴史的文脈に位置づけて検討し，新たな Parsons 像を打ち出そうとしている．そのさいに，未公刊の資料を調査し，一般的にあまり知られていないテクストの論文集を出版したりもしている[3]．そのようにして，Parsons の成熟する理論的アイデアの源泉であり，Camic が最も重要であると考える初期 Parsons の研究を生み出してきたのである[4]．そして，1992 年に *American Sociological Review* 誌に“Repuation and Predecessor Selection: Parsons and the Institutionalists”（以下，「評判と先祖選択」論文と表記）という論文を発表する[5]．この論文での Camic の中心的な主張は，以下のとおりである（Camic 1992）．Camic は，Parsons が『社会的行為の構造』において議論した理論家－すなわち，Marshall，Pareto，Durkheim，Weber－は，Parsons のプロジェクトに対する本質的な理論的関連性ではなく，

「評判のよい」という要因ゆえに「選択」された，と示唆したのである．さらに，他の社会科学者，ことにアメリカの制度学派経済学者は，本質的にまさに関連性があるにもかかわらず，Parsons はこれらの人物を無視した，とも主張される．Parsons が制度学派経済学者を無視した理由は，制度学派の威信がアメリカにおいて，そしてとりわけ Parsons が所属していたハーヴァード大学というローカルな環境のなかの有力な人物たちの間で失墜したからとされる．Parsons は先祖としてヨーロッパ人を選択したのであり，それはハーヴァード大学経済学部でキャリアを歩み始めた彼の運命をコントロールする人々，すなわちハーヴァードの新古典派経済学者の間ではるかに評判がよかったからである，と Camic は結論づけた．

こうした Camic の初期 Parsons 解釈に対して，Alexander と Giuseppe Sciortino（以下では，「Alexander ら」と表記する）が論争を仕掛けた．彼らからすれば，Camic の Parsons 解釈はあまりに皮相に過ぎ，いたずらに Parsons を貶めることにしかならず，それは古典を再構築するというよりも，解体するような試みと目に映ったのであろう．というのも，Parsons は，きわめて功利的な理由から制度学派を意図的に無視し，ヨーロッパにおける社会学の巨人を取り上げた，というのだから．

彼らは，そうした Camic の Parsons 解釈を放置することができず，1996 年に *Sociological Theory* 誌において“On Choosing One's Intellectual Predecessors: The Reductionism of Camic’s Treatment Of Parsons and the Institutionalists”という論文を著した．この論文はのちに Alexander の著作 *Neofunctionalism and After* に収録されたが，副題は“Why Charles Camic is Wrong about Parsons’ Early Work”とより痛烈なものに改められている．もちろん，彼らの論文は，Camic の研究が単に Parsons 解釈という狭い枠にとどまるものではなく，社会思想の歴史的研究の方法論と知識の社会学に大きな影響を与えるものであると考え，この批判を行ったものだと考えられる．

この Alexander らの批判に対して，同誌上において，Camic は“Alexander's Antisociology”という論文で Alexander らの批判に応答し，反批判を行っている．ここでの Camic の舌鋒はきわめて鋭い．両者は初期 Parsons の解釈において，そして古典の読み方，学説研究に対する考え方において，真っ向から対立している．

両者の論文のタイトルからも，かなり激しいやり取りであることが予想できるだろう．それはこの論争が単に Parsons 研究にとどまるものではないからである．それらは，ある学説を研究するということの両極を代表するものといえるだろう，そのやり方は全く異なっており，対立しあった解釈が生み出される．この論争は，学説研究のあり方を考える上で多くの示唆を与えるものであると考える．すなわち，Alexander らが指摘するように，「Camic と向かい合うことは，Parsons の伝記と知的集積の特定の解釈に対決すること以上の意味がある．方法論的レベルでは科学的アイデアに対する強い歴史主義アプローチの主

張を分析することを意味し，理論的レベルでは知識の社会学に対する道具主義的アプローチの巧妙な新しいヴァージョンに対決することを意味する」のである（Alexander and Sciortino 1996: 154）．そこで，この論争を素材として，古典をいかに読むべきであるのかということについて，あらためて考えることとしたい．

## 3　論争における争点

Camic の研究の基本的な目的は何であろうか．Camic はなにも Parsons を貶めようとして，「評判と先祖選択」論文を書いたわけではないだろう．むしろ，彼は，Parsons の知的遺産を批判的に評価し，この遺産が構成された過程の社会学的分析を追求することによって，初期 Parsons の正確な理解を目論んでいる．というのも，Camic は初期 Parsons を高く評価しており，その重要性をより強調したいがゆえである．

Camic は Parsons に関する現在の主流の解釈に対する不満をあからさまに表明している．社会学は，『社会的行為の構造』という豊かな遺産から「驚くほど」少ないものしか汲み取っていない．初期 Parsons の貢献は無視されたか皮相的に扱われた，と Camic は示唆する．Parsons に関する多くの解釈者は，より成熟した著作から遡行して Parsons の初期の展開を解釈するという目的論的パースペクティヴを用いた．そうであるがゆえに，初期の仕事における決定的に重要な部分が根本的に誤解された，と Camic は指摘する．その理由は，Parsons 理論の解釈者たちは，現代の歴史的研究ではもはや基準となっていること，すなわち思想家が置かれた知的社会的な文脈の分析を怠っているからである．

実のところ，Alexander も初期 Parsons を重要視している．だが，彼のアプローチは Camic とまったく異なっているし，Parsons 解釈も相容れない[6]．Alexander が Sciortino とともに Camic に対して浴びせる批判はおよそ 5 点である．それらを手短に記せば，以下の通りである．第 1 に，Camic の説明は還元論的であるということ．第 2 に，Camic の説明は自己矛盾をきたしているということ．第 3 に，知的先祖選択の規準を無視しているということ．第 4 に，Parsons と制度学派の差異が考慮されていないということ．そして第 5 に，Parsons の知的経歴が曲解されているということ、である．

以下，Alexander らのこれらの批判とそれに対する Camic の応答を詳しく紹介し，検討していく[7]．

### 3.1　還元論

#### 3.1.1　Alexander の批判

Alexander らの Camic 批判の第 1 は，Camic の説明が外在主義的である，というものである（Alexander and Sciortino 1996: 159-60）．Camic は先祖選択の 2 つのあり方として，

「内容適合モデル」と「評判モデル」を提示している．内容適合モデルは，Parsons がその内容の欠陥ゆえにアメリカの社会科学（すなわち，制度学派）から向きを変え，『社会的行為の構造』のプロジェクトに対してよりよく適合する内容を含んでいるがゆえに，Marshall，Pareto，Durkheim，Weber を利用したとして，先祖選択過程を説明するために用いられている．対して評判モデルは，「先祖の選択としてありうるものが，その思想家のローカルなネットワークで流布している信念や意見にきわめて依存している」という事例を記述するためのものである（Camic 1992: 440）．Alexander らは，これらは新しい装いはしているものの，科学史・科学哲学における「内在主義」と「外在主義」の再現であるにすぎない，と主張する．ナイーヴな内在主義者はあらゆる思想家をその思想家自身の言葉で捉えようと試みる．内在主義者はその思想家が先祖を選択するにあたって，その選択に真理と正統性が存するものと想定するのである．そして彼らは，主に理論家自身の合理性を再構築し，解釈することに専心する．他方で，外在主義者は，典型的に反対の誤りを犯している，と Alexander らは指摘する．外在主義者は，いわゆる社会的－組織的，経済的，政治的－要因，すなわち思想家に対してこうしたアイデアを採用するに至らしめている「原因」となる要因を発見することに関心を寄せるのである．

Camic は内容適合モデルが実質的かつ方法論的に深刻な弱点を有していると考えているようだ．というのも，内容適合モデルは，「歴史的で社会制度的状況」における流動性を無視し，「先祖選択過程をその社会制度的文脈から」切断し，「主に内容に基づいてはいない先祖選択の可能性」を否定することになるからである（Alexander and Sciortino 1996: 157-58）．

確かに，Camic が強調するように，外在的な要因を考慮することは必要であろう．このことは Alexander らも認める．だが，外在的要因は決して独立で理論的選択の説明をすることはできない．選択は外在的要因によって影響されるが，そうした選択はある範囲の戦略でもあるからだ．知的先祖の選択はいつでもより広い意味での意図を含んでおり，その意図は主体性に依存しているのである．

Alexander らは，こうしたより幅広い理論的主体性が探究されなければならない，と主張する．彼らによれば，かりに理論家がその知的先祖や同僚，そしてその敵さえも，いかに選択するのかを考察するならば，外的要因を取り除いた「選択規準」を与えるものとして，まさに理論家の主体性を理解することができるのだ．したがって，選択の規準をこそ研究することが重要なのであるが，Camic はこうした規準について考慮していない，と Alexander らは批判する．

結局のところ，Camic は，評判のネットワークというものが科学を構築するうえで演じる批判的役割という道具主義的アプローチの妥当性を論証しようと試みているのだが，そのことがただちに制度学派が知的先祖として正当であったということを立証するものでは

ない，というのが Alexander らの主張である．

### 3.1.2　Camic の応答

第 1 の批判に対して，Camic は概ね以下のように応答している（Camic 1996: 179-80）．Alexander らは，「行動主義」や「交換理論」，「道具主義」など，Camic 自身が使ってもいない概念に関連づけて，外在主義というレッテル貼りをしているに過ぎない．そもそも，外在主義と内在主義という区別は古臭いものである．むしろ，彼らこそ「社会制度的文脈から先祖選択の過程を切断する」という実践を行い続けている，すなわち還元主義的なのである（Camic 1996: 179）．

こうした内在主義と外在主義という時代遅れの区別は，Alexander らのものであって，自らに押し付けられる謂われはない，と Camic は主張する．彼らは，Camic に外在還元主義のレッテルを貼るがそれはまったく的外れなものである．Camic はむしろ，経済的政治的要因を中心にした説明を明示的に批判している，というのが Camic 自身の言い分である．Alexander らが考える「社会的なるもの」はきわめて狭いものであって，Camic が採用する前提とは異なる．Camic は繰り返し強調する．彼は，自らの用いる「社会的なるもの」が，科学者が互いに依存し，互いに信用性を捜し求める集合的過程を意味するものであるという．そして，そこに焦点を当てるのは，科学社会学における最近の仕事に示唆されたからである，と述べる．

この点で若干の注釈を付けくわえると，最近の科学社会学の動向は，Camic が主張するとおりのようである[8]．その意味で，Alexander らよりも，Camic のほうが最新の科学社会学に学んでその仕事を展開しているということは言えるかもしれない．

さて，Camic の反論に戻ろう．彼は，そうした科学者間の集合過程に焦点を当てるとするならば，1920 年代と 30 年代のアメリカの社会科学者の置かれた条件を考慮し，ハーヴァード大学での初期の Parsons の低い職業的地位と，社会学というディシプリンのアカデミズムにおける低い立場について言及せざるをえないのだ，と主張する．すなわち，ある思想家を特定の社会歴史的文脈に位置づけなければならないし，それとの関連で「組織的」要因を明らかにする必要があるというのだ．

## 3.2　議論の自己矛盾

### 3.2.1　Alexander の批判

次に，Alexander らは，Camic の議論が自己矛盾をきたしていることを指摘する（Alexander and Sciortino 1996: 160-61）．Camic の中心的主張は，Parsons が『社会的行為の構造』において制度学派経済学者を無視し，代わりに単なる一つの理由だけでヨーロッパ人に向いたということである．その唯一の理由とは，Camic によれば，制度学派の評判

があまりにもネガティヴなものであり，そのキャリアを確立しようとする，あるいは少なくとも「信用できる理論的言明」を生み出そうとしていた若き Parsons の努力においてあまり役立つものではなかった，ということである．こうした Camic の中心的主張を，Alexander らは仮説 1 とする．しかしながら，この主張は，彼らが仮説 2 と名づけるものに依存するものである．その仮説 2 とは，制度学派理論はヨーロッパの理論と同様に Parsons が『社会的行為の構造』において構築した理論のための基盤を供給する，というものである．Camic の「評判モデル」の議論は，まさにこの第 2 の主張の妥当性に依存する．かりに仮説 2 が論駁されるなら，仮説 1 は決定的に棄却に導かれることになる．

こう述べたうえで，Alexander らは仮説 2 を打ち砕こうとする．Alexander らの戦略は，Parsons と制度学派の関係を検討するさいに，Camic が自ら否定したはずの内容適合の方法論を用いているということを明らかにすることである．Camic は，『社会的行為の構造』と制度学派経済学の間にはきわめて大きな内容上の類似性があるということを，内在主義的な解釈によって明らかにしようとしている．Parsons と制度学派の間に内容適合が存在することを証明して初めて，Camic は Parsons の先祖選択に関する評判という要因のインパクトを議論しているのだ．

結局のところ，Camic はわれを忘れて分析家が内容適合を探求することから始めるべきだと示唆している，と Alexander らは指摘する．評判という要因は，必然的に一次的なものから二次的なものに格下げされる．評判モデルは，一般的な選択の領域を説明することができない．それは，きわめて制限された領域内で，他の先祖ではなくある先祖がなぜ選択されたのかを説明することができるだけなのだ．

Camic の議論の中身は，その形式的に言明された目的と矛盾している．なにゆえそうした矛盾が生じるのか．Camic がこうした自己矛盾に陥っていることは，彼の個人的な失敗ではなく，彼が擁護したがる外在主義的立場の不適切さに帰せられるべきである，と Alexander らは断じるのである．

### 3.2.2　Camic の応答

Camic はこの第 2 の批判に対しても真っ向から反論している（Camic 1996: 181-82）．Camic によれば，Alexander らは「評判と先祖選択」論文をまったく誤読しているという．彼らは，Camic の論文が内容適合モデルを拒否するための取り組みであるものと解釈している．そして，Camic が内容適合モデルを拒否しようとしているにもかかわらず，それに依存し，またそれを欠かすことができないという自己矛盾に陥っている，と彼らは主張するのだ．しかし，これは荒っぽい誤読にすぎない．

Alexander らは「評判モデル」を「社会制度的」あるいは「社会組織的」あるいは「より単純に「社会的」と呼んでいる．このことから明らかなように，彼らは社会的なる領域

から内容適合モデルを追放するものである．Camic は，このことをもって，Alexander らが反社会学的指向をもつと断罪する．こうした基本的な誤りから，Alexander らはこれら 2 つのモデルを直接的に内在的－外在的区別に当てはめるのである．内容適合を本来的な科学的基準に，評判を「社会的－組織的，経済的，政治的－要因」にである．そして，そうしたうえで，Alexander らは Camic を一方的に評判の側に追放している．

Camic は Alexander らよりも自身の研究のほうが科学的であると主張して，以下のように繰り返し述べる．「評判と先祖選択」論文の歴史的目的は，Parsons をヨーロッパの社会理論家の仕事に至らせたのは 1920 年代と 30 年代のアメリカの社会科学の不完全な内容－狭い実証主義と功利主義－であったという広範な学問的主張を再検討することである．この目的を達成するために，その論文は歴史調査研究者の間で標準的な方法論的実践となっているものに従っている．それは実際に制度学派の内容を検討しており，制度学派の仕事の内容は Parsons が『社会的行為の構造』のプロジェクトのために必要とした素材として欠陥があるものではなかったということを見出している．制度学派の内容に関するこうした証拠は，Parsons が内容の探求においてヨーロッパ人に追いやられたという主張を論駁するために明確に提出された．このような証拠も，内容適合モデルのみを適用した説明に異議を唱えるのに十分なのである．

### 3.3　知的先祖選択の規準

#### 3.3.1　Alexander の批判

第 3 の批判は，Camic の内容適合モデルに向けられる（Alexander and Sciortino 1996: 162-63）．Camic は Parsons の理論内容に制度学派が実際に適合しているということを決して論証しているわけではない，と Alexander らは示唆する．Alexander らによれば，知的先祖選択の研究において重要であるのは，選択それ自体ではなく，選択に適用された妥当性の規準である．だが，Camic はその規準について注意を払っていない，というのだ．

これに対して，Alexander らは，より直接的に選択規準それ自体の問題に移行しようとする．Alexander らからすれば，Camic のやり方はさまざまな断片だけを用いた解釈によって Parsons の先祖を構築するものである．それによってあれこれの思想家を含んだり排除したりすることは，明らかに適切なことではない．というのも，「あらゆる仕事があらゆる他のものに対して類似性と差異性を有している」からである（Alexander and Sciortino 1996: 163）．

『社会的行為の構造』は，当時のヨーロッパないしアメリカの社会理論の文献を網羅したサーヴェイであることを意図したものではないし，そういうものとして提示されたのでもない．それは Parsons の理論的目的にとって，最も重要な意味を持つと考えられた少数の著者の仕事との関係において展開が図られた理論的原理を正確に言明するものとして提

示されたのである．

なによりもまず，Parsons 自身が実際に制度学派について語ったことを調べることが必要なのだ．だが， Camic はこうしたことを無視したり，過小評価したりしている．Alexander らは Parsons 自身の言明から次のように解釈する（Alexander and Sciortino 1996: 164）．Parsons は，制度学派の立場は擁護できない，と主張している．なぜか．それが社会的事実に対する分析的アプローチと具体的アプローチを混同していたからである．こうした区別は，Parsons にとってきわめて重要であった．なぜならば，そのころまで，Parsons は新カント派であり，理論的分析に対する分析的で，構造化された擬似先験的な枠組みを生み出すことに関心を寄せていたからである．このことは実際，『社会的行為の構造』のより大きな仕事の 1 つであったのである．

確かに Parsons はいつでも制度学派の重要性を認識していた．だが，それと同時に，制度学派は誤った道を進んだ，ともたびたび述べていた．制度学派は経験的なやり方で功利主義に反対する議論を展開したが，しかるに『社会的行為の構造』において Parsons は分析的な批判をすることを決定したのである．制度学派は社会学を全体的な現象の百科事典的科学として主張したけれども，実質的に『社会的行為の構造』のあらゆる章や節がこの考え方の限界を論証し，対照的に社会学を他の社会科学から経験的にではなく分析的に差異化する必要を示唆することが意図されていた．Alexander らのこうした見解が正しいとするならば，確かにここに見て取れるのは Parsons と制度学派の間の断絶であろう．

Alexander らは，続けて Camic の Parsons 解釈における問題点について述べる．Camic は『社会的行為の構造』における Parsons の意図について，「実質的な理論的見解」と「方法論的な見解」の区別を導入した．そして，すでに別の論文で前者の問題を取り扱ったので，「評判と先祖選択」論文ではそれを取り扱わないとしている．しかし，こうしたやり方は多くの問題を引き起こす，と Alexander らは指摘する．第 1 に，それは Parsons と制度学派の根本的で決定的な差異を見えないものとする．第 2 に，Camic が『社会的行為の構造』における方法論的問題と呼ぶもののこうした不可視性は，制度学派の立場と Parsons にとってその本の真の理論的関心であるものとの関係を曖昧にしてしまう．

Parsons にとって「分析的なるもの」は単に認識論的な立場というだけではない．Parsons は新カント派に深く影響され，それゆえプラグマティズムに反対するようになった．また，こうした認識論的問題が実質的信念に強く結びつけられた．そして，Parsons の方法論的理論的道具になっていったのである．こうした Parsons にとっての「分析的なるもの」の重要性を過小評価してはならない．「分析的なるもの」は Parsons の先祖選択にとって理論的にきわめて重要な基準であった．そう考えると，制度学派は，Durkheim，そして Weber の社会学が Parsons に提供することができた知的資源と同様なものを持ち合わせていなかったと考えるほうが自然である．以上から，Parsons がなにゆえ制度学派の

貢献を拒絶したのかを理解することができる．すなわち，Parsons が問題にしたのは制度学派の評判ではなく，その思想（内容）にあったのだ，と Alexander らは断言するのである．

### 3.3.2　Camic の応答

知的先祖選択の規準という問題に関しても，Camic は Alexander らの批判をはねつける（Camic 1996: 182-83）．Camic は，選択の規準は当然のことながら検討している，と述べる．Alexander はそれを見落としているに過ぎない．科学社会学における調査研究の伝統にもとづいて，近代の科学共同体におけるこうした選択基準の位置を記述している，と主張する．

Alexander らは，Camic が 知的先祖を選択する規準をついて考えていない，と非難する．だが，この非難は明らかに正しくない．「評判と先祖選択」論文で繰り返し現れているテーマは，まさに科学的思考の生産において先祖の選択基準の信頼性が中心的なものなのだ，ということである．その論文では，アメリカの先祖に対してヨーロッパの先祖を Parsons が選択するということに光を及ぼすためにこうした規準を用いている．こうした選択をするにあたって，「Parsons は，その議論に出会いそうな形作られた集団と彼自身の両者にとって，知的に信用できる議論を打ち立てることに努めた」，と「評判と先祖選択」論文は論じるのである（Camic 1996: 182）．

要は， Alexander らは注意深く論文を読んでおらず，的外れな批判を行っているにすぎない，と Camic は主張する．さらに，自らの「評判と先祖選択」論文は，先に言及したような科学社会学における調査研究の伝統に則ったものであるのに対して， Alexander ら自身が持ち出す選択基準はこうした科学的な調査研究における手続きを欠いている．

科学的信用性に対する真剣なコミットメントという観点から Parsons の先祖選択を理解することは，結局のところ，彼を自動的で考えのない「中毒者」として理解することとは正反対のことなのである．Alexander らは，「評判と先祖選択」論文が Parsons の先祖選択に対する「疑似合理的な交換理論」の「道具主義的アプローチ」を提供していると告発している．だが，「評判と先祖選択」論文の最後の主要な節では，以下のように指摘している．「Marshall，Pareto，Durkheim，Weber の堅固な評判の立場への Parsons の関心は，４人のヨーロッパの思想家の選択が道具主義的な策略であったということを意味するものではない」（Camic 1992: 436）．Alexander らはこの主張について脚注で目立たないように触れるのみで，気づかなかったかのような扱いをしているのだ，と Camic はあてこする．

### 3.4　Parsons と制度学派の差異

#### 3.4.1　Alexander の批判

第 4 に，Alexander らは，Camic が制度学派と Parsons の差異を無視している，ということを批判する（Alexander and Sciortino 1996: 164-65）．彼らは，Camic の理解には根本的な欠陥があると宣告している．そうした欠陥は，Camic の解釈が，Parsons と制度学派の間の重要な「差異」を無視して，両者の「広範な類似性」に焦点を当てているがゆえに生じるものである．

Alexander らが指摘する制度学派と Parsons の差異とは，Parsons が制度学派の「社会的事実に対する具体的アプローチ」に反対したということ，そして Parsons が「分析的なるもの」を重視したことである．Alexander らからすれば，この点は制度学派と Parsons の断絶として決定的である．Parsons はこうしたアイデアに同調できないがゆえに，制度学派を『社会的行為の構造』において知的先祖として選択しなかったのだ，と主張する．

#### 3.4.2　Camic の応答

Alexander らは自信に満ちた調子で上記のような批判を浴びせるが，まったく認められるものではない，と Camic は応じる（Camic 1996: 183-84）．彼らは，制度学派のどんな著作も，関連する二次文献も引用することなく，Parsons と制度学派の間に重要な差異があるという主張を推し進めている．制度学派に関する調査をほとんどすることもなく，制度学派の性質に関して権威的に勝手な想定をしているにすぎないのだ．Alexander らによって引用された制度学派の性格に関する唯一の証拠は，Parsons 自身によるその主題に関するいくつかの声明から成っている．この種の証拠の信頼性については，現代の方法論的な見地からすると，かなり疑問視されている，と Camic は指摘する．

Parsons が彼の「分析的アプローチ」の点で制度学派とは異なっているという主張に，「評判と先祖選択」論文はきちんと向き合っている．Alexander らは，そのことを無視している．もちろん， Parsons と制度学派の間には重大な差異が存在したということを，Camic も否定するものではない．しかし，にもかかわらず Alexander らに反して，こうした差異の同定は Parsons の先祖選択の社会学的分析にとってのいかなる代用品も与えるものではない，と主張する．結局，非常に多くの顔ぶれの学者が示したように，Parsons もまた重要なやり方で彼が先祖として取り上げたヨーロッパの思想家とは異なっていたのである．さらに，かりに『社会的行為の構造』が分析的アプローチを欠いているがために制度学派を批判するとするならば，Parsons が実際に取り上げた Marshall はどうなのか，Durkheim や Weber はどうなのか，と類似した非難を向けなければならないはずだ．矛盾しているのは，Alexander らの主張なのである．

### 3.5　Parsons の知的経歴の解釈

#### 3.5.1　Alexander の批判

最後に Alexander らは，Parsons にとって制度学派の影響が決定的に重要であるという推測を十分な証拠を持たずに行っている，と Camic を批判する．そう述べた上で，3 点の推測上の誤りを指摘している（Alexander and Sciortino 1996: 165-68）．

Alexander らは， Parsons のアマースト大学の学部生時代における制度学派への愛着に関して，Camic の提示した証拠を検討する．そして，それらの証拠からまったく違う解釈を示そうとする．Camic は，Parsons が学部生のときに代表的な制度学派経済学者である Walton H. Hamilton と Clarence E. Ayres によって深く影響され，そうした経験の結果として生物学から社会科学へ移ることを決心したのだ，ということを強調する．そして，制度学派はアマースト大学時代から『社会的行為の構造』の時代まで Parsons の志向に継続的な効果を持っていたに違いない，とも Camic は論じている．

Alexander らは，この点をかなり疑問視する．Parsons は疑いもなくとても早熟な 21 歳の青年であっただろう．だが，若い頃に用いた選択基準がその後もそのまま変わっていなかったとするのはいかにも不自然だ．Alexander らは次のように説明する（Alexander and Sciortino 1996: 166）．多くの社会科学者は，その最初の大学のコースで社会科学を「発見」している．彼らはその機会に学んだアプローチによって後々までどのくらい拘束されたと感じるだろうか．「こうした命題は Konrad Lorenz がガチョウを例に示した強い刷り込み要因のようだ」と Camic を揶揄する（Alexander and Sciortino 1996: 166）．要するに，Camic が用いている証拠，すなわち Parsons に関する詳細な伝記や『社会的行為の構造』以前に出版した論文は，Camic が主張したこととはまったく異なったことを語っているのだ．

Parsons がアマースト大学以後に制度学派の思想をなお支持していたという証拠を，Camic は提示してはいない．むしろ，Alexander らは，『社会的行為の構造』のアイデアが浮かぶ以前に，Parsons は制度学派の思想について長いこと根本的な疑いを持っていたように思える，と主張する．これが第 2 のポイントである．Parsons は 1927 年にハーヴァードに行った．そもそもなぜハーヴァードなのか．制度学派の理論的敵対者であった新古典派経済学者と研究するためではないか，と．ということは，ハーヴァード大学に行く前に，すでにアマースト大学での経済学の訓練が不適切なものであったと感じていたのであろう．

以上のことが認められるのならば，Camic の主張の問題点は明らかである，と Alexander らは続ける．というのも，このことは制度学派から Parsons が目を背けることを誘引したのがハーヴァードとその新古典派経済学者の評判のインパクトであったという批判的主張とぶつかり合うものだからである．若き理論家の制度学派に対する否定的な判断が，Parsons がハーヴァード時代の評判のネットワークに参入する以前であって，以後ではな

いことを明らかにするものである．

3 点目として，Alexander らは Parsons がヨーロッパの大学で過ごした 2 年間に言及する．Parsons は LSE では失望させられたが，ハイデルベルクでの研究の経験には深く影響されたことを語っている．Camic はこの Parsons のヨーロッパ時代を必ずしも十分に考察していない．Alexander らは指摘する．すなわち，Weber は制度学派と内容適合するものを有していたにもかかわらず，制度学派を肯定しなかった．反対に，Weber は限界効用理論の重要性を受け入れており，それは彼の社会学思想にとって根本的なものである．そして，そうした Weber に対して Parsons が敬服していたことはいろいろな仕事から読み取ることができる．ハーヴァード大学での評判など関係なく，彼はそれ以前にすでにして「Weber 派」になっていたのだ．

### 3.5.2　Camic の応答

Alexander らは，調査研究によって十分な証拠を提示せよ，と述べる．しかし，それは Camic が 10 年間にもわたって行ってきたことではないか．むしろ，Alexander こそが「テクストの自律」などと唱え，歴史的調査研究の重要性を十分に認めていなかったのではないのか．Camic は，まずこのように応答した上で，細かい論点にも答えている（Camic 1996: 184-85）．

第 1 に，「評判と先祖選択」論文は，制度学派が『社会的行為の構造』の時代にまで Parsons に刷り込まれていて，継続して影響力を保持していた，と主張するものでは決してない．むしろ，その論文では，Parsons の制度学派からの移行はすでに 1920 年代後期には始まっており，1930 年代初期を通じて継続された，という考えが示されている．『社会的行為の構造』というプロジェクトとの関連で，Parsons はなぜ制度学派から転換を図ったのかを理解しようとしているのだ．

第 2 に，Alexander らは，Parsons がハーヴァード大学に行く前に制度学派に関して「否定的な判断」を形成したという．だが，彼らはそのことに関するいかなる歴史的証拠も提供していない．「評判と先祖選択」論文で Camic が提供した情報に依拠して，Parsons の制度学派に対する不満がハーヴァード時代に先行しているはずだという理由づけを行っているだけだ．けれども，これは正確ではない．Parsons がアマースト大学で講師をしていた 1926 年-27 年の期間に，彼は経済学でいくつかのアメリカの大学院プログラムを考えていた．それにはウィスコンシン大学での制度学派のプログラムも含まれていた．つまり，この時点では彼は制度学派に否定的判断を下すには至っていない．ハーヴァード大学が浮上したのは，アマースト大学の学部に新しく来たハーヴァードで訓練された経済学者によってである．彼こそが，Parsons に講師の口を提供したハーヴァードとの調整を仲介した人物であり，また Parsons に制度学派が主流から外れているというハーヴァードからの情

報をもたらしたのである．ハーヴァードの経済学を体現するような人物との出会いが，ハーヴァード時代に明確に表れた制度学派に関する否定的判断に繋がっているのである．

そして第 3 に，Alexander らは，Parsons のヨーロッパ留学について，とりわけ Weber の思想との取り組みについて Camic が無視している，と批判する．しかし，そのような批判も正しくない．別の論文で， LSE 時代について，そしてハイデルベルクでの研究について，Camic は検討している．そして，彼らが述べるような，Parsons がハーヴァードに行く前にすでに Weber 派になっていたことは，「評判と先祖選択」論文ですでに指摘している，と Camic は批判に応じている．

## 4　考察

以上にみてきたように，両者のやりとりは，論争につきものなのであろうが，「やった・やらない」，「正しい・正しくない」といったことの応酬で，果たしてどちらに分があり，Parsons 解釈としてどちらが妥当であるのかを判断することはなかなか困難である[9]．本稿では最初に設定したように，Parsons 解釈の中身ではなく，おもに学説研究の方法に焦点を当てて検討したいと思う．この論争から，学説研究のあり方に対して，どんな示唆を得ることができるだろうか．

Parsons 解釈の内容としては，両者の対立点は Parsons と制度学派の関係をどう見るかにある．Alexander らは Parsons が制度学派の影響圏から脱していたと見るのに対し，Camic は Parsons の『社会的行為の構造』のプロジェクトにとって制度学派はなお大きな意味を有していたと考える．まったく別の資料や証拠を用いたわけでもないのに，どうしてこうまで大きな解釈の違いが生み出されるのか．それは，両者の研究スタイル，すなわち対象に対するアプローチの仕方や学説研究に対する考え方などに起因するものではなかろうか．

先述したように，両者の研究スタイルはまったく異なっている．Camic は社会学の古典を調査研究の対象と考える立場を強く打ち出している（Camic 1997: 1-10）．彼の研究方法は「社会的知的コンテクスト」分析として提示されたものによく表わされている[10]．その方法とは，社会学の古典を分析するときに，その古典が書かれた社会的背景や知的背景に焦点を当てるものである．それはまた，その古典を書いた研究者がいかなる社会的立場にあったのかということも検討する．その思想がどのような社会的過程において生み出されたのかを明らかにすることに主眼がおかれているのだ．

学説研究を擁護する点では Alexander も Camic と同様である[11]．だが，そのスタイルは対照的なものである．Alexander の古典の読み方は，Camic 流の歴史主義を拒否する方向にある．すなわち，彼にとって古典は何よりも「テクスト」であり，「テクストの自律性」を重視する読み方をする（Alexander 1987）．というのも，彼の関心は歴史にではなく，

あくまでも一般的な理論的論理の分析にあるからだ．要するに，彼は理論構築を重視するタイプである[12]．

学説研究のあり方としては，これまでもいろいろな分類が指摘されてきた．古くは内在主義と外在主義の区別があり，そのほかには，歴史主義と現在主義（Camic 1997; Jones 1977; 横井 1988），理論構築と学史記述（横井 1989）などがあげられよう．内在主義と外在主義の区別についてはここで繰り返さない[13]．歴史主義と現在主義の区別とは何か[14]．歴史主義は，ある学説を生み出した思想家の意図に注目する立場である．そうした意図は，その思想家が発言したり，書いたりしたものからだけで理解できるわけではない．ある思想家の意図は，その思想家の置かれた社会的歴史的文脈を理解することによって可能となる，と歴史主義は主張するのだ．それに対して，現在主義は，現在まさに進行している議論に古典を位置づけ，そうした議論に対する貢献という観点で古典を考察するものである．したがって，ここではある学説を生み出した思想家の意図は等閑視される．ときには，その思想家が必ずしも意図したとは思われないこともテクストから読みこんでいく．

理論構築と学史記述という対比は説明するまでもないだろうが，理論構築を志向する古典の読み方が新たな理論を作り出すために過去の学説を利用しようとするのに対して，学史記述を重視する読み方はある学説ないし思想というものを学の歴史のなかにいかに位置づけることができるのかという観点を重視する．したがって，理論構築と学史記述の対立は，社会学理論に関心があるのか，あるいは知識社会学ないし科学社会学に志向するのかということの違いともいえるだろう．

こうした研究スタイルの区別に両者を当てはめれば，Alexander が現在主義的で理論構築志向であり，対して Camic が歴史主義的で学史記述のタイプであることは明白である[15]．ところで，研究スタイルがある特定の研究結果を必然的に生み出すわけではないとしても，研究スタイルに全く拘束されるところがないともいえないように思う．ある種の研究スタイルをとったとき，ある種の傾向をもった研究結果が生み出されがちであるのではないか．この論争を検討していると，そのように思われてくる．このことが正しいとするならば，私たちはそうしたことに十分注意しなければならないということが，この論争から得られる教訓なのではないだろうか．

社会学における古典は文学作品ではないし，古典を研究することも文学作品を読むこととは異なっているだろう．それでもなお，社会学においても古典的作品の唯一正しい読み方などはないのだろう．基本的には，古典は多様に読まれてよいのだと思う．そして，そもそも研究の目的が違えば，違う解釈も生まれてくるだろう．だが，時として，ある読み方がその後の社会学の展開にとってかなり決定的な影響を与える場合がありうる．そうであるならば，どんな読み方でも許される，といってすますこともまたできないかもしれない．本稿が取り上げた論争は，まさに両者にとってそう考えられたがゆえに生じたものと

理解することができる．したがって，生み出された解釈に対して，さまざまな研究上の立場の相互の対話による慎重な検討が求められるのであろう．

最後に，この論争に対する若干の私見を付け加えておきたい．Camic の Parsons 研究の目的が，Alexander らが非難するのとは違って，決して Parsons を貶めることにはない，ということは強調しておいてもよいだろう．彼は熱心に Parsons について研究し，また知られていない初期の Parsons の仕事についても紹介をしている．Camic は疑いもなく Parsons の重要性を信じているがゆえに，研究を続けているように思われる．むしろ，Alexander らのほうが Camic の Parsons 解釈に対して過剰に反応しているようにも思える．また，Camic の研究の方法であるが，彼自身が述べるように最新の科学哲学や科学社会学に学んで，そうした手法を古典研究に導入している．この点では，Alexander よりも Camic のほうに分があるように思われる．むろん，Camic はそもそもが知識社会学ないし科学社会学に多大の関心を持っているので，そのことをもって Alexander を断罪するのは酷かもしれない．いずれにせよ，Camic の仕事にも学ぶべき多くの点があり，もう少し注目されてもよいだろう．

## 5　おわりに

本論文の目的は，Alexander と Camic の間でなされた論争を素材として，現代における学説研究の可能性について考察することにあった．それにしても，なぜ私たちは過去の学説を読むのだろうか．古典といえるような学説を読み，学ぶことの積極的な意味は何だろうか．いろいろあるだろうが、ここでは一つの理由をあげておきたい．

もともと社会学はその対象がきわめて広範囲で，方法や立場も多様な学問である．それにはいい面も悪い面もあるだろう．だが，社会学における多様性という傾向はますます高まっているように思われる．あまりにも多様性が高いと，もはや異なったアプローチをとるグループ間で対話が成り立たず，学としての統一性が失われる懼れがあるのではないか．

哲学者の伊勢田哲治は科学哲学における社会認識論の有用性を検討するために，一つの事例として社会学を選び，検討している（伊勢田 2004）．とくに彼が対象としたのは，戦後アメリカ社会学の展開であり，その理論的方法論的多様化についてである．社会認識論は，認識論の問題に社会学的な理論や知見を結びつけるという，それ自体興味深いものではあるが，ここではそれは措くとして，彼は社会学のそうした状況について社会認識論を適用して，以下のように述べている．すなわち，「社会学の現状は，望ましい状態よりも多様度が高すぎる」というのである．この指摘は，私たちにとってとても気になるところであろう．むろん，こうした指摘は社会学者であるならばすでに馴染みのものでもある．たとえば，パラダイムの多元的な状況は何度となく問題にされた．そして，Merton などは，

多様性には効用があるがゆえに，そうした状況は決して社会学の危機ではなく，むしろ望ましい状態であると診断した（Merton 1975）．だが，そうした議論が成り立つのも，パラダイム間の対話が可能であればこそである．

現在の社会学には，おそらく共通言語が必要である．伊勢田は社会生物学，進化心理学がそうした共通言語に成り得るという提案をしている[16]．だが，学問の共通言語はまずは古典に求められるのであろう．社会学というものの共通理解を与えてくれるもの，それこそが古典ではないだろうか．私たちは，研究を始めた比較的初期の段階で古典を読み，学ぶことによって，その学問がどのようなものであるのかをつかんでいくことができる．そして，そのことを通じて，その後において異なった研究上の立場やスタイル，研究対象を持つことになった人同士でも対話が可能になる．そのことは，結局のところ，ディシプリンを強化することにつながるのだ．むろん，古典も古典とされているからというだけでその地位を保てるわけではなく，学説研究の蓄積によって，絶えず更新されなければならない．

学史や学説の研究はいかにも古臭く，「社会学」研究の生産性という観点からは，必ずしも効率的ではないだろうし，重要性も低いものに思われるかもしれない．だが，それらは決して過去の遺物ではないだろう．無のところからまったく新しい何かを創造できると考えるのは幻想にすぎない．私たちにできることは，伝統を受け継いでそれを再生産するか，あるいは変形することだけである．そのためにも，私たちは，古典を読み続けなければならない．

**注**

[1] 実際に，社会学において理論・学説研究を専門とすると研究職への就職が難しくなるのかは，確かめられた事実ではない．だが，社会学教員の公募情報などを眺める限りでは，理論・学説研究の求人は他の分野よりも明らかに少ないように思われる．

[2] 溝部（2001）によれば，Camic にはおおよそ 6 本の Parsons 研究の論文があるそうである．

[3] Camic は 1991 年にシカゴ大学出版局より，自身の序論を付して，*Talcott Parsons: The Early Essays* を出版している．

[4] Camic が打ち出した新たな初期パーソンズ解釈は，かなり注目を集め，広範に受け入れられたようである．そうした解釈が広まることに対して，Parsons に連なる人々（弟子や孫弟子など）は苦々しく思っていたようだ．あるいは危機感を抱いたのかもしれない．彼らは Camic の批判に向かう．代表的なものに，Mark Gould の 1991 年の論文がある．

[5] Camic のこの論文に関しては，溝部明男によって詳しく紹介された（溝部・田邊 2006）．

[6] Camic と Alexander，この両者の研究スタイルの違いについて，溝部（2001）が分析を試みている．

[7] 3 節に含まれる以下の項では，Alexander and Sciortino(1996)と Camic(1996)の論文を要約して紹介する．引用箇所の挙示は煩雑になるため，重要な部分のみに留めたことをお断りしておく．

[8] この点は，科学哲学者である伊勢田哲治の著書に詳しい（伊勢田 2004）．

[9] 本来であるならば，Parsons と制度学派の関係について，両者の議論を念頭においてきちんと精査す

ることができれば，初期 Parsons 解釈に資するものが得られるのであろう．だが，私自身は Parsons 理論や Parsons その人に関する専門的知識に欠けており，残念ながら専門家のそうした研究に対して容易に評価を下す能力を持たない．

[10] Camic のこうした「社会的知的コンテクスト分析」という方法についても，溝部（2001）が詳しい．参照されたい．

[11] 学説研究の評判が芳しくないのはアメリカでも日本と同様のようである．それゆえに，Alexander も Camic も，学説研究を擁護する論文をわざわざ書いて，その重要性を訴えている．Alexander（1987）や Camic（1997）など．

[12] 横井は，Alexander の古典の読み方について，「基本前提という一つの論理的基準を定立し，いわばそこから，歴史を後知恵に基づいて構成してゆく営みである」と述べている（横井 1989）．

[13] 内在主義と外在主義の区別に関して，その区別を採用した Alexander らを Camic はかなり痛烈に批判している．Camic によれば，その区別はいかなる有用性も持たないものと，科学社会学の世界においてすでに歴史的に判定されたものである．Camic はいまごろこうした区別を持ち出すことは素人はなはだしいとまで述べている．

[14] 歴史主義については，Robert A. Jones の立場などを中心にして，横井（1988）において詳しく紹介・検討がなされている．

[15] むろん，Alexander と Camic の両者とも，理論構築と学史記述のどちらか一方だけがあれば足ると考えているわけではない．とりわけ，Alexander が４巻からなる浩瀚な作品 *Theoretical Logic in Sociology* で Durkheim，Marx，Weber，そして Parsons までを検討してみせたのは，まさしく理論構築と学史研究を両立させようと試みた仕事であったろう（横井 1988）．だが，そうはいいつつも，両者ともどちらかに傾きを見せていることも明白に読み取れる事実であろう．

[16] 伊勢田のこうした診断や提案は，社会学者自身が検討してみなければならないことだろう．しかし，私見ではあるが，伊勢田も指摘しているように，社会生物学的な考え方を取り入れるということは，私たち社会学者にとってあまり気の進むことではない（伊勢田 2004: 238）．

## 文献


Alexander, J. C., 1987, “The Centrality of the Classics,” Anthony Giddens and Jonathan Turner eds., *Social Theory Today*, Polity Press, 11-57.

——, 1998, *Neofunctionalism and after*, Blackwell.

Alexander, J. C. and Giuseppe Sciortino, 1996, “On Choosing One's Intellectual Predecessors: The Reductionism of Camic's Treatment of Parsons and The Institutionalists,” *Sociological Theory*, 14(2): 154-71.

Camic, Charles, 1992, “Reputation and Predecessor Selection: Parsons and The Institutionalists,” *American Sociological Review*, 57: 421-45.

——, 1996, “Alexander's Antisociology,” *Sociological Theory*, 14(2): 172-86.

——, 1997, “Classical Sociological Theory as a Field of Research,” Charles Camic ed., *Reclaiming the Sociological Classics: The State of the Scholarship*, Blackwell, 1-10.

Gould, Mark, 1991, “The Structure of Social Action: At Least Sixty Years Ahead of Its Time,” Roland Robertson and Bryan S. Turner eds., *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*, Sage Publications. （=1995，中久郎・清野正義・新藤雄三訳『近代性の理論－パーソンズの射程』恒星社厚生閣）

伊勢田哲治, 2004, 『認識論を社会化する』名古屋大学出版会.

Jones, Robert A., 1977, “On Understanding a Sociological Classic,” *American Journal of Sociology*, 83(2): 279-

319
Merton, Robert K., 1975, “Structural Analysis in Sociology,” Peter M. Blau ed., *Approaches to the Study of Social Structure,* The Free Press, 21-52.（=1982, 斎藤正二監訳『社会構造へのアプローチ』八千代出版）
溝部明男, 2001, 「パーソンズ研究における二つのスタイル－J. C. アレグザーンダと C. カミック」『金沢大学文学部論集　行動科学・哲学編』21: 45-96.
溝部明男・田邊浩, 2006, 「C. カミックの Predecessor Selection 論－古典の「歴史主義的読解」の一例として」関西社会学会第 57 回大会報告.
横井敏秀, 1988, 「『歴史主義』の学史方法論」『社会学史研究』10: 82-98.
――, 1989, 「社会学史研究における古典解釈の問題」『現代社会学研究』2: 72-95.